教育研究の広場

ひらめき☆ときめきサイエンス「マングローブ林のおもしろさ大切さ」を実施

馬場教授からマングローブの不思議さ、大切さを聞く

2月25日（土）、西表島で中学生を対象とした「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」が実施された。これは科学研究費補助金による研究成果の社会還元・普及事業のひとつとして、日本学術振興会が本年度から開始したプログラムであり、本年度は全国の22大学で35件のプログラムが採択され、本学からも2件が採択・実施されることになったものである。その2回目にあたる今回は、「熱帯生物圏研究センター西表実験所」を会場とし、中学生を対象に「マングローブ林のおもしろさ大切さ」をテーマに西表実験所馬場繁幸教授によって実施された。

また、社会還元・普及事業推進委員会の横山広美委員（総合研究大学院大学上級研究員）、及び学術振興会から小寺孝太郎総務係長ほか1名も視察のために東京から参加していただいた。

プログラムは西表実験所の講義室で始まり、マングローブの基礎知識を学んだ後、参加者全員が着替えて、近くのマングローブ林に移動し、野外での体験学習を行った。

最初に研究推進戦略室長の佐藤教授から「沖縄の自然は非常に珍しいものだが実際に住んでいる人はそれに気付かないことが多い。皆さんには、自分達の身近にあるマングローブの不思議さ、そしてその大切さを学ぶなかで、是非、科学する心を育ててほしい」と挨拶があり、横山広美委員からも「このプログラムは大学でどういう研究をしているのかを知ってもらうことを目的としており、今日は大学生になったつもりで参加してほしい。科研費とは日本の研究を支えてきた補助金であり、皆さんに研究を頑張っている先生方を見て頂きたい」との話があった。馬場教授の講義では、マングローブの木が重くて水に沈むこと、高さ60メートル以上に成長する種類もあること、年輪が無いこと、葉が塩辛いことなどの説明を聞きながら、参加者は実際にマングローブの切株を手に取ったり、葉をかじってみたりしながら、興味津々で講義に聴き入っていた。

マングローブ林内での体験学習には、馬場教授の他に、仲里長浩 東海大学沖縄地域研究センター講師、貝類・魚類担当として池辺裕子氏、山地の植物担当として石垣長健 西表実験所技術職員及び津嘉山健技術職員、農学部学生等々が参加してプログラムをサポートした。参加者は幾つかのグループに分かれて野外観察を行い、講義で覚えた木の名前を言い合ったり、グループの担当者に矢継ぎ早に質問をしたりしていた。また担当者も、時折足を止めては様々な動植物の特徴を丁寧に説明していた。海岸のマングローブ林で昼食をとった後、さらにヒナイ川をカヌーで溯る体験が実施された。川岸に見えるマングローブ林は海岸とはまた違った景観を見せ、参加者は初めて体験するカヌーをおぼつかない手つきで漕ぎながら、その様子を興味深く観察していた。上流でカヌーを降り、さらにヒナイサーラの滝までの山歩きの途中でも、西表島特有の珍しい植物や風景を目にすることができた。ヒナイサーラの滝は、前日までの雨で滝の水量が増しており、その豪快さに参加者は圧倒された様子であったが、中には服を着たまま滝つぼに飛び込む元気な中学生もいた。

野外ではマングローブ林に棲む生物を手にとって観察

カヌーを漕いでヒナイサーラの滝を目指す

体験学習後には、実験所に戻って閉会式が行われ、新本光孝 熱帯生物圏研究センター長から「冒頭に佐藤教授がマングローブの大切さを学んでほしいと言われたが、正直に、学ぶことができたと思う人は拍手をお願いしたい」との言葉があり、会場からは盛大な拍手が起こった。また、日本学術振興会小寺係長から「何故だろう？と思うことが研究の始まり。研究は楽しいものだということが分かったと思う。是非、大学に進んで、立派な研究をしてほしい」との挨拶があった。最後に修了証書の授与式があり、参加者のなかから将来優秀な研究者が育ってくれることを期待して馬場教授から一人ひとりに「マングローブ未来博士号」の証書が授与された。今回参加した中学生は西表島に初めて来た者も多数おり、参加者からは「山猫のフンを見つけた」、「カヌーがすごく面白かったが、滝までの山道が大変だった」、「またあったら次も来たい」などの率直な感想が聞かれたが、何よりも前日夜半までの大雨が、当日の朝には奇跡的に上がり、青空のもとで野外学習を含む全プログラムをケガ、事故もなく終了できたことが幸いであった。

マングローブ未来博士号を授与

今回のプログラムには、石垣島・西表島の中学生60名余りの参加希望が寄せられた。しかし、一度に受け入れられる定員の関係で、今回は40名余りの中学生と引率の教諭が対象となった。このため、今回のプログラムに参加できなかった希望者21名には、後日（3月4日）、馬場教授によって同様のプログラムが別途に実施され、参加を希望した全員がプログラムを修了することができた。佐藤教授によれば、「沖縄のサンゴ礁・マングローブ林は本土に住む者にとっては極めて魅力的な自然であり、観光資源として注目されるのは良く分かるが、その一方、これらの自然生態系は地元の若い世代の人材育成、特に科学する芽を育てるという意味でも大きく貢献できるものである。本学は、今後、このようなかたちでの地域貢献を多様に果たしていく必要もあるのではないか」ということであった。また、馬場教授からは「今後は、是非、中・高の教員を対象にしたプログラムを計画してみたい」という意見が聞かれた。